

甲藤好郎先生のご逝去を悼む：甲藤先生を偲んで

Mourn over the Death of Prof. Yoshiro Katto: in Memory of Katto Sensei

門出 政則 (佐賀大学)

Masanori MONDE (Saga University)

1月21日、甲藤先生の訃報連絡を庄司先生より受けてからというもの、気持ちの整理がつかず、何か心の中に空虚さを抱えたまま時間だけが過ぎ去っています。ここに、甲藤先生に指導していただいた事柄をあれこれと思い出すままに御紹介して、深甚なる哀悼の意を表したいと思います。

* 甲藤先生との出会い

大学院入試での面接時、指導教官の希望調査があります。甲藤先生という方は、厳しさの反面心温まる指導をして下さると増岡先生から情報を得ていましたので、迷わず「甲藤研」を希望しました。幸いにも、希望が叶い、1971年4月から先生のご指導を受けることができるようになりました。研究室はその当時、庄司先生（その4月から講師になられた）、数士先輩（当時、D2）と修士4名のこぢんまりとした研究室でした。甲藤先生のご指導を受ける機会は、毎土曜日午前10:00~12:00の間で、英語論文を紹介するという輪講でした。2時間以内に、原文のままを解説するというものでしたが、先生は初見にもかかわらず、いつも院生の説明の途中で論文を読み終わっておられました。解説の途中で、論文の目的や良い点などについて熱のこもった議論がなされましたが、修士1年の自分（院生には、前もって論文が渡されていたにもかかわらず、英文内容を追うのが精一杯でした）にとって、その時間は非常に厳しいもの、時には全く内容が分からないままに終わりとなる有様でした。しかし最後に、先生から論文内容についてのコメントと総括がなされて、何となく、参加できたという気分になったものでした。そして輪講後、先生と一生に皆で昼食をとりながら雑談をするというのが慣例であり、楽しみの一つでした。ここでの話題は、科学的なトピックス、たとえば当時の東大の“ペンシルロケットの飛行軌跡”あるいは「力学」関連の内容、かと思えば“猫と犬の行動比較”、時には“うどんとそば談義”など豊富で多岐にわたりました。しかし、このたわいもない話題を

真剣かつ楽しく議論する時間の中で、先生から“学問とは”、“研究とは”という本質的なものを教えていただき、“研究者の心構えや考え方”そして“研究の目指すもの”などについての先生のお考えを知ることができました。このような温かい環境が、自由に議論することや新しい知識を得ることの楽しさを身につけてさせてくれたのだと思います。また夏休みには毎年ゼミ旅行（2泊3日）がありましたが、ご多忙にもかかわらず先生はいつも参加してくださいましたので、貴重なご経験やお話を身近に伺うことができました。

一方、研究テーマを決めるに当たっては、まず始めに「博士課程まで進学するのか？」と尋ねられ、「はい、そのつもりです。」と答えると、「では“限界に挑戦するテーマ”にしよう」とおっしゃり、バーンアウト熱流束（後に限界熱流束と呼ぶ）の世界の最高を目指そうということになりました。先生は、その当時すでに沸騰を支配している核沸騰液層を人工的に制御することによって沸騰の限界を改善できるとの予見を持っていらしたのだと思います。この研究テーマのお陰で、長年に亘って先生のご指導を受けることになりました。限界熱流束の研究では、強制流動沸騰系についてはその当時まだ一般的な見解もなく、混沌とした状態でした。だから限界熱流束データを検討する時、全体の特性を見失うことがないように、先生はいつも高い視野と広い視点から見通しておられました。学生であった自分がある限りの知識でデータをまとめ、いろいろな理屈をつけて結果を報告すると、先生は、「君の考え方は、キン斗雲に乗った孫悟空みたいだな。局所的には正しいかもしれないが、果たしてその考えに普遍性があるのかい。」とおっしゃいました。「お釈迦様の掌全体を考えながら理解しなさい。」とのご指導をいつも受けました。一方、不揃いでばらつきのある私の図上のデータを御覧になり、先生は大局的見地から大胆に“エイ”と一気に線を引かれる事もありました。そのような時私は、細かいことにとらわれず全体の

追悼

特性を矛盾なく説明なさる先生の深い知識に驚かされたものでした。私の局所的で矛盾だらけの説明に対し、理解不足や知識の不十分な点を厳しく指摘なさいましたが、最後にはいつも、「若いんだからもっと本を読んで勉強しなさい。」と励ましや温かいお言葉をお忘れになりませんでした。

大学院修了後、佐賀大学に赴任し、熱力学や伝熱工学の講義を担当することになった折にも、講義の内容に関連した資料を送ってくださったり、執筆なさった科学的な随想や研究論文などをいただいたりもしました。また学会で論文発表をした際も、多くの助言をしていただき、研究の指針を絶えず示していただきました。そのような先生の温かいお心遣いにいつも感謝しながら、なんとか、ここまで研究活動を続けることができたと思っています。

* ドイツへの留学

1983年にドイツに留学する機会を得ましたが、留学の機会を作っていただいたのも先生のお陰です。その頃の留学事情は、外国の教授に手紙を送り自己アピールをして外国の奨学金を得、留学するというなかなか厳しい状況でした。そのような折、先生から Hahne 教授 (Stuttgart 大学) を紹介していただき、さらに非常に丁寧な推薦状を準備していただきました。現在もその推薦状のコピーを大切に保存していますが、先生の推薦状を Hahne 教授は高く評価され、Hahne 教授から即受け入れの返事を受け取ることができました。先生の「信頼性」があつてこそ、若い私がドイツで研究する機会を得ることができています。

* 限界熱流束のマクロモデルの完成

原村君 (現在、神奈川大学教授) が博士論文を修了する年 (?) の 12 月だったと記憶しているのですが、科研費の中間成果発表会が福岡で行われたとき、会場への道すがら「限界熱流束の特性を普遍的に説明できるモデルを構築することができた」とのお話を、先生に伺いました。これは、まだ企業秘密だからここだけの話だよと弾んだ声で話されたお姿をいまでも鮮明に記憶しています。そのお顔は、10 数年に亘って密かに暖めていらしたお考えがすっかり晴れ上がった、というようにお見受けしました。その

ときは簡単な考え方の説明だけでしたが、後で詳細なお手紙を戴きました。そのお手紙で、長年暖めて来られた「核沸騰液層」に対する先生のお考えが、確固たる内容として完成されていることを知らされました。先生は、「1 つの仮説を実験事実の積み上げで実証するのが科学だよ」といつも話していらっしゃいました。完成されたモデルは、プール沸騰のみならず、簡単な強制対流の限界熱流束にも普遍的に適用できることを、その後発表なさっておられます。

* Irsee での沸騰国際会議

1997年5月、ドイツの Irsee で沸騰に関する国際会議が開催されました。その会議で、先生は限界熱流束に関する特別招待講演をなさいましたが、偶然にも先生のご指導を受けた増岡先生、庄司先生、原村先生と私の4名も一緒に参加し、論文を発表する機会がありました。会議主催の半日観光旅行では、美しい城 (Schloss Neuschwanstein) を訪ねました。海外旅行の経験は豊富な先生ご夫妻でしたが、車での経験がないとのことでしたので、教え子4人で会議終了後の小旅行を計画しました。2日間という短い日程でしたが、先生ご夫妻と一緒にドイツアルペン街道に沿った非常に美しい田園風景の中を走りました。宿泊は、Berchtesgaden 近郊の Gasthof。花が窓一面に飾られた山小屋風のこの宿を、一目見て気に入られた奥様のご希望だったのです。車での旅だからこそ探せた宿でした。先生にも大変喜んでいただき、楽しい一夜を皆で過ごすことができました。翌日は、美しい湖 (König see) にもご案内し、静かな自然と一体となる中で、ご夫妻共々我々も、ゆったりとしたこの上ない時間—今となつては何にも代え難い思い出の時間—を過ごすことができました。この旅行が先生との最後の旅行となりました。

ご一緒している時いつも、さりげなくおっしゃる「含蓄ある言葉」や「教え」にもう接することができないと思うと、残念で寂しい気持ちでいっぱいです。お釈迦様の掌のような広い知識と大局的見地をもって、長い間温かくご指導くださったことに感謝しながら、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌